農協を考える

農協合併へのあゆみ　その一

農業は曲りかどにきている

きのうまでは農業政策のにない手は農協でした。経済成長の波に乗って、国の受託業務で経営はどんどんふくらみ、それが農協本来の仕事のようにみんな思いこんできました。その安易な気持は長くつづきましたが、いま、農業を取り巻く情勢の変化で、農業経済が足踏みしだし、農業政策は後退をはじめました。その試練をどう克服し乗り切っていくのか、これが今後の農協が負わされた最大の課題であり、悪くすると農協の崩壊にも繋がりかねない大問題です。

昨年開かれた全国農協大会において、農協の脱皮ということが盛んに論議され、この難局に対処するための総合三カ年計画が決められ、その中に自主建設路線という言葉がうたわれています。

自主建設とは、これまでのような安易な政治依存を排除して、自主自立互助の協同組合精神に徹し、主体性をもって、きびしい内外の環境変化に対処していく路線ということです。その中には組織の連携機能の強化が強調されています。

たとえば、きのうまでは農業および農協は、ハウス内の園芸作物のように、政治という被覆物に保護されてきたから、割合に安易な日々を送ることができたが、農業が政治に虐待されだしたいまも同じように政治に依存していたらどうなるか、農協指導者達がそのことに気づいたからです。

先般ある組合員と次のことで私は議論をしました。現に黒字経営の農協が合併することによって、組合員へどれだけの恩典が返ってくるかとの問題についてでした。

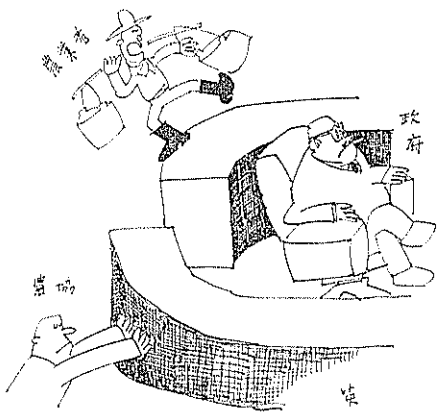
確かに農協経営だけのことを考えると合併することによって経営の黒字に多少の増減があっても大した問題ではありません。逆に広汎な区域になることによって、その利用能率において、不都合の生じる場合さえあるでしょう。だが、いま農協に課せられた最大の使命は、当面したこの大きな曲がりかどをいかに上手に曲がり切るか、そのハンドルさばきを受け持たなければならないのは、唯一無二の農業団体である農協以外にはないという現実が、他の何物にも優先するという一事だけであります。

政府は食管法を楯に取って米作の減反耕作を押しつけてき、本県でもことしは昨年の二・三倍にのぼる数字ですが、そのぼう大な空白の土地に作物の転換を要求していますが、何をどう作ったらよいのか、具体的なことは何一つ明示できません。

いま自由経済の中で、特殊な作物を除いたら、農民は自分の意志でなんでも作れるからです。結局農業の指導と育成ということの使命を持つ農協がその任に当たらねばならないのは論を待たないことです。個々の組合員の自覚を促すのも、営業指導の一理であるからです。

いま王座を誇る本県の園芸作物の出荷販売は県園芸連が一手に引き受けていますが、ピーマンなどの生産過剰が現実化してき、転作からくる過剰がさらに追い打ちをかけようとする時代にあっては、各農協が組合員の自覚に基づいて連携を保ちながら、栽培面積の合理的な配分とするところまで営農指導の徹底を期さなければ、莫大な投資を必要とする加温園芸ほど安心してやれないことになります。

これは県外同時期の産地との連携も必要になってきますが、こうした時代の流れに適応するためにも、小さな農協などでは話相手になりません。ここらにも大同合併への要素が多分に含まれています。



曲り角にきた農業

こんどの農協合併の持つ意味は

いかにして農協を発展させるかということよりも、農協の力でいかにしてこの難局を乗り切り、農業を繁栄へ導くかということに根本的なねらいがあるのであって、そのための組織強化が主目的であると考えるべきでしょう。

要するに農協は常に農業の防波堤でなければならないとよく言われますが、それがまた、いまほど切実に要求される時代はないのです。

おわりに

以上は私が新聞雑誌で得た知識へ、私自身の意見を加えたものですが、十分に私自身の知恵とはなり切っていない個所もあって、独善のそしりを免れないかも知れませんが、とにかく愚見を述べましたので、これに対する建設的なご意見がありましたらどしどしお聞かせを願いたいものです。

それによって、南国市内の各農協が勇気と決断とをもって合併へ踏み切り、その成果として、香長平野の農業が無事にこの難局を乗り切ることができ、合併各農協が高度な成長を遂げ得るなら、これに越したよろこびはないからです。

十市梨夫